

インタビューにおける無音区間と次発話設計 —学生インタビュアーの言語行為の観察—

大塚明子

要旨

本稿は、相手の語りを引き出すインタビュアーの言語行為の一端を、無音区間とその後の発話立ち上げの観点から明らかにすることを目的とする。記事作成のための学生インタビューを対象に、インタビューの発話終了後からインタビュアーの発話開始まで、すなわちターン交替時の無音区間と、インタビュアーのターン内に生じる無音区間を区別し、ターン交替時の無音区間については生起理由と次発話機能を分析した。その結果、2.00秒以上の長い無音区間は、主として筆記と結びついていた。また、長い無音区間の後には、受領を置いてから具体化・新情報要求へ移行する傾向がみられた。以上から、無音区間は単に言葉の詰まりによる停滞ではなく、相手の発話を記録し、受け止め、次の質問へ接続するための時間的資源として機能していることが示唆された。

キーワード

インタビュー、インタビュアー、無音区間、発話立ち上げ、言語行為

1. はじめに

相手の経験や考えを聞き出す際には、単に質問を提示するだけでなく、相手の発話を受け止め、必要に応じて確認し、さらに具体的な語りへと導く発話を行う。とくにインタビューは、相手から話を引き出すことに特化した相互行為であり、インタビュアーの発話は、インタビューの語りの展開に大きく関わる（大塚 2024、2025）。そのため、インタビュアーの言語行為は、質問文の形式や質問内容だけでなく、相手の発話を受けた後にどのように次の発話を立ち上げるかという観点からも捉える必要がある。

活字媒体におけるインタビューは、日常会話と同様に話者交替を伴う相互行為である一方、記事作成という目的のもとで役割分担があらかじめ設定された制度的なやりとりでもある。ライフスタイルマガジン型の取材では、インタビュアーは相手と良好な関係を保ちながら、経験・評価・背景説明・心情を語りとして引き出し、記事化可能な情報へと整えることを求められる（大塚 2025）。この過程において、無音区間はどのように置かれ、次の発話の立ち上げとどのように関わっているのだろうか。無音区間は、会話の停滞や言葉の詰まりとして否定的に捉えられやすい。しかし、記事作成のためのインタビューでは、相手の発話を記録し、理解し、次の質問を設計するために、一定の時間が必要になる場合がある。本稿では、学生インタビュアーによる記事作成のためのインタビューを対象に、無音区間とその後の発話立ち上げを分析し、相手の語りを引き出すインタビュアーの言語行為の一端を明らかにする。

なお、大学教育では、レポート作成、聞き書き、学生新聞、卒業研究、地域調査などにおいて、学生がインタビューを行う機会がある。本稿で無音区間の現れ方を記述することは、学生が相手の応答後の発話立ち上げを考えるための一つの手がかりとなる。

1.1 研究目的

本稿の目的は、学生インタビュアーによる記事作成のためのインタビューを対象に、相手の語りを引き出すインタビュアーの言語行為を、無音区間とその後の発話立ち上げの観点から明らかにすることである。具体的には、ターン交替時の無音区間とターン内無音区間⁽¹⁾の長さの分布を示したうえで、ターン交替時の無音区間について生起理由および次発話機能との対応を分析する。これにより、無音区間が相手の発話を記録し、受け止め、次の質問へ接続するための時間的資源としてどのように用いられているかを観察・分析する。

1.2 先行研究

インタビューについての先行研究では、質問の展開方法や応答途中の発話など、インタビュアーの言語形式・機能に焦点を当てた分析が行われている（大塚 2025、2026・田中 2011・陳 2016）。また、会話研究ではターン交替やオーバーラップに関する知見が蓄積されており（串田他 2017）、話し言葉研究においてはポーズを時間的単位として記述する枠組みも示されている（前川 2003）。さらに、ターン交替ギャップについては、質問一応答間のギャップがきわめて短いこと、またポーズやギャップの長さが相互行為上のタイミングと関わることが指摘されている（STIVERS et al. 2009、LEVINSON and TORREIRA 2015）。

また、ニュース・インタビュー研究は、インタビューが制度的に組織された会話であることを示しているが（CLAYMAN and HERITAGE 2002）、活字メディアのインタビューを制度的会話として捉えたうえで、無音区間を相互行為の資源として位置づけ、その時間的側面を記述した研究は、管見の限りない。インタビューでは、インタビュアーは相手の発話を聞き取り、その後の発話を組み立てながら相互行為を進行させる（大塚 2024）ため、本稿では、この過程に関わる現象として無音区間に着目する。

2. データと分析方法

2.1 分析対象

分析対象は大学発行の新聞記事作成のために行われた、学生インタビュアーによる陸上部の学生へのインタビューである。インタビュアーは学内メディアの記事を作成するサークルに所属するジャーナリズム学科 2 年生で、約 60 回のインタビュー記事作成経験がある。インタビューは質問事項をあらかじめメモし、半構造型の対面で行われた。分析データは約 25 分である。なお、本稿はインタビュアーの言語行為を記述するという研究目的に沿い、分析対象をインタビュアーに限定している。インタビュアーの発話内容は、話の内容評価へ議論が広がりやすいためインタビュアーが何を語ったかよりも、インタビュアーがどの位置で無音区間を配分し、どのように次行為へ接続するかに着目する。

2.2 分析方法

2.2.1 データと分析の前処理

インタビューの音声データを音声分析ソフト Praat でインタビュー어가話し終わった際のターン交替時、およびインタビュアーのターン内無音区間（時間）を測定した。ターン交替時の無音区間を G、ターン内無音区間を P とし、小数第 3 位を四捨五入し、第 2 位まで記録した。その数値、および無音区間終了後の発話の機能（以下、次発話機能）F をアノテーションし、インタビューの逐語書き起こしシートに記入した。この逐語書き起こしシートをもとに無音区間に何を行っていたかについて（例：メモを取っていた、アドリブの質問を考えていた等）を対面で筆者がインタビュアーに聞き取りを行い、無音区間の理由 R として記入した。ただし、P はすでにインタビュアーのターンが開始された後に現れるため、G のようにそれが生じた理由や「無音区間の後にどのような次発話を立ち上げたか」を独立して対応づけることは難しい。したがって、本稿では P については持続時間の分布を示すにとどめる。

2.2.2 無音区間の分析区分

ターン交替時の無音区間 G とターン内無音区間 P を、それぞれ 5 区分した。会話研究では、質問—応答の交替ギャップはおよそ 0.2 秒前後とされることが多く（STIVERS et al. 2009、LEVINSON and TORREIRA 2015）、日本語話し言葉コーパスでも 0.2 秒以上のポーズ位置を転記上の区切りの目安としている（前川 2004）。本稿はこの知見を参照しつつインタビューにおける無音区間の分布を可視化するため、0.2 秒未満をほぼ即時の G0/P0 とし、G0/P0 : 0.00～0.19 秒、G1/P1 : 0.20～0.49 秒、G2/P2 : 0.50～0.99 秒、G3/P3 : 1.00～1.99 秒、G4/P4 : 2.00 秒以上とした。

2.2.3 ターン交替時の次発話機能の区分

次発話機能 F の分類は、直前のインタビュー어의発話をどのように受け止め、次にどのような応答を求め、インタビューの進行にどのように接続するかを判断基準とした。この判断基準は、疑問文を情報要求・確認要求として扱う日本語モダリティ研究（日本語記述文法研究会編 2003、宮崎他 2002）、聞き手の短い反応を談話進行の資源として扱う談話研究（メイナード 1993、宇佐美 2020）、さらにインタビューを役割分担のある制度的相互行為として捉える研究（CLAYMAN and HERITAGE 2002）を背景としている。ただし、これらの先行研究の分類を個別に組み合わせたのではなく、逐語書き起こしデータをもとに分類を設定した。具体的には、表 1 に示すように、F1～F8 の 8 分類とした。

表 1 次発話機能 F の分類

コード	名称
F1	事実確認要求
F2	具体化・新情報要求
F3	受領
F4	評価・情動
F5	要約・言い換え
F6	情報提供
F7	感想・主張・意見
F8	話題転換・進行管理

1 ターンで 2 機能の場合は、例えば「はい、ありがとうございます。では、どのように感じましたか。」という発話ならば、最初の「ありがとうございます」=F3（受領）、その後の「どのように感じましたか」=F2（具体化・新情報要求）なので、次発話機能は F3→F2 となる。

2.2.4 無音区間の理由区分

ターン交替時の無音区間 G にインタビューーは何をしていたのか。無音区間の時間を記した逐語書き起こしシートをもとに、インタビューーに聞き取り調査を行った。その記述を G の理由 R として整理・分類したものが表 2 である。

表 2 ターン交替時無音区間 G の理由 R の分類

R	要約（本稿の定義）
R_write	筆記（インタビューーの応答を書き留める）
R_plan	質問リスト確認（質問リストを見て次質問を選ぶ）
R_unexp	想定外対応（想定外の返答に対する戸惑い、驚き）
R_affect	感動・納得・感情移入
R_form	言い方探索（表現調整）
R_receive	受領・あいづち

3. 分析結果

3.1 無音区間 G・P の分布

本節では、ターン交替時の無音区間 G とターン内無音区間 P の長さの分布を示す。G では、インタビューーの発話終了後にインタビューーがどのように発話を立ち上げるかを観察する。一方、P では、発話を開始したインタビューーの同一ターン内の無音区間がどのような長さかをみる。

集計・比較にあたっての G と P は、2.2.2 に示した。表 3、表 4 に、G と P の長さ区分別分布を示す。

表 3 ターン交替時の無音区間 G の長さ区分・比率・平均と代表値

区分	範囲（秒）	件数	比率（％）	平均（秒）	中央値（秒）
G0	0.00～0.19	3	7.9	0.07	0.05
G1	0.20～0.49	10	26.3	0.30	0.28
G2	0.50～0.99	3	7.9	0.92	0.92
G3	1.00～1.99	4	10.5	1.47	1.50
G4	2.00 以上	18	47.4	4.10	3.98
全体	—	38	100.0	2.26	1.77

表 4 ターン内の無音区間 P の長さ区分・比率・平均と代表値

区分	範囲 (秒)	件数	比率 (%)	平均 (秒)	中央値 (秒)
P0	0.00～0.19	0	0.00	—	—
P1	0.20～0.49	15	27.8	0.35	0.35
P2	0.50～0.99	14	25.9	0.81	0.87
P3	1.00～1.99	8	14.8	1.52	1.52
P4	2.00 以上	17	31.5	3.91	3.69
全体	—	54	100.0	1.76	0.94

ターン交替時の無音区間 G は全 38 件であり、平均は 2.26 秒、中央値は 1.77 秒であった。最も多いのは G4 の 18 件 (47.4%) であり、G 全体の半数近くを占めていた。次いで G1 が 10 件 (26.3%)、G3 が 4 件 (10.5%) であり、G0 と G2 はそれぞれ 3 件 (7.9%) であった。インタビューの発話終了後にインタビュアーがほぼ即時に応答を開始する例は多くなかった。

ターン内無音区間 P は全 54 件であり、平均は 1.76 秒、中央値は 0.94 秒であった。最も多いのは P4 の 17 件 (31.5%) であり、次いで P1 が 15 件 (27.8%)、P2 が 14 件 (25.9%) であった。

ターン交替時の無音区間 G とターン内無音区間 P では、いずれも 2.00 秒以上の無音区間が最も多い点が共通していた。一方、0.50～0.99 秒の区分は、G2 が 3 件 (7.9%) であったのに対し、P2 は 14 件 (25.9%) であり、ターン内無音区間ではこの長さの無音区間が相対的に多くみられた。以上から、G は 2.00 秒以上の区分に集中するのに対し、P は P1、P2 にも分布するという相違が確認された。

3.2 ターン交替時の無音区間 G と生起理由 R

本節では、2.2.4 で述べたインタビュアーへの聞き取り調査をもとに、ターン交替時の無音区間 G がどのような理由によって生じているかをみる。表 5 に、ターン交替時の無音区間 G の長さ区分と生起理由 R の対応を示す。

表 5 ターン交替時の無音区間 G と生起理由 R の対応

区分	R_write	R_plan	R_unexp	R_affect	R_form	R_receive	計
G0	0	0	0	2	0	1	3
G1	0	0	3	0	0	7	10
G2	1	1	0	0	1	0	3
G3	1	0	2	1	0	0	4
G4	11	1	0	5	1	0	18
計	13	2	5	8	2	8	38

G 全体では、R_write（筆記）が 13 件で最も多く、次いで R_affect（感動・納得・感情移入）と R_receive（受領・あいづち）が各 8 件、R_unexp（想定外対応）が 5 件であった。R_plan（質問リスト確認）と R_form（言い方探索）は各 2 件だった。

長さ区分別にみると、G0 では R_affect が 2 件、R_receive が 1 件であり、0.20 秒未満のほぼ即時の応答は、感情反応や受け止めにみられた。G1 では R_receive が 7 件、R_unexp が 3 件であり、0.20～0.49 秒の短い G は、相手の発話を受け止める反応や、想定外の返答に対する反応と結びついているとみられる。

G2・G3 はそれぞれ 3 件、4 件と少数で、筆記、質問リスト確認、言い方探索、想定外対応、感情反応などが分散して現れていたが、特定の生起理由に集中する傾向はみられなかった。G4 では R_write が 11 件と最も多く、G4 全体 18 件の過半数を占めた。また、G4 では R_affect も 5 件みられた。したがって、2.00 秒以上の長い G は、主としてインタビューの応答を筆記する時間として生じており、加えて、インタビューの語りに対する感動・納得・感情移入によって生じる場合もあった。

以上から、短い G では受領や想定外対応が中心であり、中間的な G では特定の生起理由への集中はなかった。一方、長い G では筆記や感情反応が中心であった。これは、インタビューの応答を受けた後、ただちに次の質問へ移るのではなく、相手の語りを受け止めたり、記事作成のために内容を記録したりする時間を置いていたことを示している。

3.3 ターン交替時の無音区間 G と次発話機能 F の対応

表 1 に示した次発話機能 F は、G の直後に現れるインタビューアの発話を機能ごとに整理したものである。表 6 に、G 区分と次発話機能 F のパタンの対応を示す。

表 6 ターン交替時の無音区間 G と次発話機能 F のパターン

区分	F3→F2	F3→F1	F4→F2	F1	F2	F3	F4	F5	計
G0	1	0	0	0	0	0	1	1	3
G1	0	0	1	2	1	1	3	2	10
G2	1	0	0	1	1	0	0	0	3
G3	2	0	0	0	1	1	0	0	4
G4	12	4	0	0	0	1	0	1	18
計	16	4	1	3	3	3	4	4	38

全体では、F3→F2（受領→具体化・新情報要求）が 16 件で最も多く、次いで F3→F1（受領→事実確認要求）、F4（評価・情動）、F5（要約・言い換え）が各 4 件であった。F1、F2、F3 単独は各 3 件であり、F4→F2（評価・情動→具体化・新情報要求）は 1 件であった。すなわち、G の後の発話では、単独の質問や受領だけでなく、受領の後に具体化・新情報要求へ接続するパターンが多くみられた。

長さ区分別にみると、G4 では 18 件中 12 件が F3→F2、4 件が F3→F1 であり、計 16 件が F3 から F2 または F1 へ接続するパターンであった。したがって、2.00 秒以上の長い G の後には、インタビューアがただちに新たな質問へ入るのではなく、まず「ありがとうございます

ます」「なるほど」などによって相手の発話を受け止め、その後に具体化・新情報要求または事実確認要求へ移行する傾向がみられた。

一方、G0・G1 では、F1 や F4 や F5 などの短い反応もみられた。G1 では F4 が 3 件、F5 が 2 件、F1 が 2 件であり、短い G の後には、評価・情動、要約・言い換え、事実確認要求などが分散して現れていた。以上から、G4 では受領から次の質問へ接続するパターンが多いのに対し、G0・G1 では短い反応や確認要求が分散して現れており、G の長さによって次発話機能の現れ方に違いがみられた。

3.4 ターン内無音区間 P

3.1 で述べたインタビュアーの同一ターン内に生じる無音区間 P の長さの分布をみて、インタビュアーが発話開始後にどの程度の時間を内部に配分しているかを確認する。表 7 に P0-P4 の件数・比率と代表値を示す。

表 7 ターン内無音区間 (P) の件数・比率・平均

区分	範囲 (秒)	件数	比率 (%)	平均 (秒)	中央値 (秒)
P0	0.00～0.19	0	0.0	—	—
P1	0.20～0.49	15	27.8	0.35	0.35
P2	0.50～0.99	14	25.9	0.81	0.87
P3	1.00～1.99	8	14.8	1.52	1.52
P4	2.00 以上	17	31.5	3.91	3.69
全体	—	54	100.0	1.76	0.94

ターン内無音区間 P の総数は 54 件で中央値は 0.94 秒、平均は 1.76 秒であった。P4 (2.00 秒以上) が 31.5%で最も多く、P1 (27.8%)、P2 (25.9%) も一定数みられる。短い P と長い P の双方が存在することから、インタビュアーはターン開始前だけでなく、ターン開始後にも無音区間を配分していることがわかる。

4. 考察

4.1 無音区間を時間資源としてみる

本稿の分析から、学生インタビュアーのターン交替時の無音区間 G は、単なる応答の遅れではなく、インタビュアーが発話を記録し、受け止め、次の質問へ接続するための時間として機能していることが示された。とくに長い G では、筆記が主な生起理由として現れ、その後には受領を置いてから具体化・新情報要求または事実確認要求へ進むパターンがみられた。これは、学生インタビュアーが、相手の発話後にすぐ次の質問へ移るのではなく、内容を記録し、相手の発話を受け止めたことを示したうえで、次の問いへ接続していることを表している。

一方、短いターン交替時の無音区間 G では、受領・あいづち、感情反応、想定外対応が中心であった。つまり、短い G は、相手の発話を即時的に受け止めたり、驚きや納得を示したりする反応と結びついていた。これに対して、長い G は、主として筆記と結びつき、

感動・納得・感情移入によって生じる場合もみられた。このことから、G の長さはインタビュアーがその時点で行っている作業の違いを反映していると考えられる。

ターン内無音区間 P については、生起理由 R および次発話機能 F を付与していないため、G と同じようにその働きを特定することはできない。しかし、発話開始後にも比較的短い無音区間と長い無音区間の双方が生じていたことから、インタビュアーはインタビュイーの発話終了後だけでなく、いったん自分のターンを開始した後にも、質問の構成や表現調整のための時間を必要としていた可能性がある。

以上から、インタビューにおける無音区間は、単に「話していない時間」ではなく、相手の語りを聞き取り、記録し、受け止め、次の発話へ接続するための時間資源として捉えることができる。とくに学生インタビュアーの場合、長い無音区間は未熟さや停滞の表れとしてだけでなく、記事作成のための記録と、相互行為上の接続を保つための発話立ち上げに関わるものとして理解する必要がある。

4.2 インタビュー教育への示唆

本稿の結果は、インタビュー教育において、無音区間を単純に減らすべき対象として扱うのではなく、相手の発話を記録し、受け止め、次の質問を設計するための時間として捉える必要があることを示している。ここで想定する教育場面は、大学の授業、学生新聞、聞き書き、卒業研究、地域調査など、目的をもった聞き取りを行う場面である。

授業内では、質問項目の設定や依頼の仕方に焦点が当たりやすいが、本稿の結果からは、相手の応答後に内容を記録する時間を取り、その後に受領を示してから次の質問へ接続することも、重要な発話運用であることが示唆された。したがって、無音区間が記録、受領、次質問の設計に関わる時間として生じるものであることを示唆しておくこともインタビュー実践の場面では有用なのではないか。

無音区間の教育的意義は、沈黙をなくすことにあるのではない。むしろ、相手の発話を受け止め、必要な内容を記録し、次の発話を組み立てるための時間を確保することの意味を理解する点にあるといえる。

5. おわりに

5.1 結論

本稿は、学生インタビュアーによる記事作成インタビューを対象に、無音区間をターン交替時の無音区間 G とターン内無音区間 P に分けて観察した。分析の結果、G については、長い無音区間が主として筆記と結びつき、その後には受領から具体化・新情報要求または事実確認要求へ接続するパターンがみられた。これにより、ターン交替時の無音区間は、単なる沈黙や停滞ではなく、インタビュイーの発話を記録し、受け止め、次の質問へ接続するための時間として機能していることが示された。

P については、持続時間のみを記録した。その結果、ターン内にも一定の長さをもつ無音区間が確認された。本稿では P に生起理由 R および次発話機能 F を付与していないが、発話開始後にも無音区間が生じることを示す補助的指標として位置づけた。

5.2 課題

本稿の分析で対象としたのは1名の学生インタビュアーによる1件のインタビューであり、結果を学生インタビュアー一般に拡張することはできない。Gの生起理由Rはインタビュアーへの事後的な聞き取り調査にもとづくものであり、無音区間中の認知過程を直接観察したものではない。また、Pについては持続時間のみを扱ったため、発話開始後の語句選択や発話構成の過程については十分に検討できていない。

今後は、複数の学生インタビュアーおよびプロのインタビュアーのデータと比較し、無音区間の長さ、位置、生起理由、次発話機能の関係をさらに検討することが課題である。

(大塚明子・おおつかめいこ・専修大学・maymay568@gmail.com)

注

1. ターン内無音区間の生起理由は、インタビュアー本人の内省報告が得られず、音声データのみから一義的に特定することが困難であるため、分析対象としない。

参考文献

- 大塚明子 (2024) 『インタビュー大全 相手の心を開くための14章』 田畑書店
- 大塚明子 (2025) 「メディア・インタビューにおけるインタビュアーの言語行為—ナラティブを引き出す発話の分析—」『専修人文論集』117, 247-267.
- 大塚明子 (2026) 「インタビュアーの質問発話—終助詞「か」による応答促進と詰問性の調整—」『専修大学外国語教育論集』54, 93-108.
- 宇佐美まゆみ編 (2020) 『日本語の自然会話分析 BTSJ コーパスから見たコミュニケーションの解明』くろしお出版
- 串田秀也・平本毅・林誠 (2017) 『会話分析入門』勁草書房
- 田中妙子 (2011) 「インタビューにおける質問の展開方法—『つなぎ表現』を中心に—」『日本語と日本語教育』39, 37-49.
- 陳力 (2016) 「インタビュイーの応答途中におけるインタビュアーの発話」『九大日文』27, 55-65.
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版
- 前川喜久雄 (2003) 「『日本語話し言葉コーパス』の設計と実装」国立国語研究所
- 前川喜久雄 (2004) 「『日本語話し言葉コーパス』の概要」『日本語科学』15, 111-133.
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- メイナード・K・泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版
- CLAYMAN, Steven and HERITAGE, John (2002) *The News Interview: Journalists and Public Figures on the Air*, Cambridge University Press
- LEVINSON, Stephen C. and TORREIRA, Francisco (2015) Timing in turn-taking and its implications for processing models of language, *Frontiers in Psychology* 6, 731.
- STIVERS, Tanya, ENFIELD, N. J., BROWN, Penelope, ENGLERT, Christina, HAYASHI, Makoto, HEINEMANN, Trine, HOYMAN, Gertie, ROSSANO, Federico, DE RUITER, Jan Peter, YOON, Kyung-Eun and LEVINSON, Stephen C. (2009) Universals and cultural variation in turn-taking in conversation, *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 106(26), 10587-10592.